

中島川水辺の表情(三) — 少年と鯰とお巡りさん —

なます

古屋 陸夫

小学四年生位の男の子、眼鏡橋近くの中島川から階段を駆け上がり、あたふたと私の目の前を走り過ぎようとする。

プラスチックの弁当箱を大切そうに、両手で囲い、頬を朱に染め興奮気味の面持ち「おい！君どうしたの」と少年は呼び止められて、私を見上げる。瞳は生き生きと輝き、息をはずませている。「魚でも捕ったの、みせてごらん」と言うと少年は弁当箱を私の方に、無言で差し出した。

少年は突然、年老いた私から声を掛けられたので、とまどった風。

だが少年からみると私はおじいちゃん、危険はない。それで安心したのか、差し出した箱のふたを取り、中味をみせてくれた。中にはCの字に曲がって入れられた魚が一匹、そして水も入れてある。窮屈そうにくねりと魚体をくねらせている。「おやつ！これは珍しい、鯰ではないか。」今日は五月晴のとってもよい日和「これは鯰だよ！こんな魚が中島川にいるのかなあ！」改めて感動の咬きを私は漏らした。

不断に川面をみている私なのだが、鯰を目にしたことは一度もない。少年は、この老人の私と、どう会話したらよいものか、とまどっている様子、だからといって機嫌が悪そうでもない。

そこで私が「この鯰、お家で飼うの」と、私は最早、囚われの身になっている鯰の運命を、思いつたのである。「うん！」と、少年は首を振り否定的な素振り。

「珍しいからお父さん、お母さんにみせるのかな」というと、少年は我が意を得たりとばかり、大きく頷き、やつと緊張がほぐれたのか、頬笑んだ。

「きつと、お父さんたち驚くぞ。」する



中島川の鯉と鯰 (写真提供：北川るみ子)

にかよからぬことで不審尋問されているみたいだなと、少年は特に感じているみたいですよ。」

「いやあー、それなら悪い！ちよつと制服脱いできましようか。今昼休みですから私服でもよいのです。」とお巡りさん。「それは面白い、坊やそうだろう。では一般の人として少年に話してみたら。」と私は言った。

「坊や、その珍しい鯰どうするの？」とお巡りさんがたずねるが少年はまだうつむいて黙秘している。いままでの緊張から、咄嗟に言葉が出ないのである。私が助け船を出す。「お父さんたちにみせて、すぐ川に戻すのだそうですよ。」お巡りさんは「坊や！それはよい。おじさんのいうように絶滅種なら、最期の数匹かもしれないから。鯰が元気なうちに、お父さんにみせてまた川に逃がしたらいいよ。」などと、穏やかに話したのである。

これらの会話を鯰は、耳をこらして聞いていて、自らの安全安心を察知したのか喜んで弁当箱の中で、ふたをポンとはねあげた。

誠に不思議、もともと鯰は不思議な魚である。子どもは敏感だ！お巡りさんに優しい口調でいわれて、ほつとしたのか、面を上げ「はいっ」と答え、笑顔を見せて元気よく、諏訪町の方へ小走りですべていった。

中島川公園での風薫る一刻でした。尚、中島川公園交番は今は無入、ここだけに限らず旭町、湊町公園交番も無人となり、町内会の安全安心交流センターなどになっている。あちこちで交番が消えていく。交番の歴史もかくのごときというべきでしょうか。(九州文学同人)

風信

○先月本協会の今年度役員会があり、昨年度の事業報告、本年度の事業計画(案)の発表があった。昨年度、本会事務所への来訪者数三、〇三一人。調査依頼(問い合わせ)一一六件。毎週月曜日開催の文化講座への出席者延べ一、二〇二人とあり、本会ますます盛況であった。

○今年度は日本ポルトガル修好一五〇周年で、本会にも長崎日ポ協会より協力の依頼あり。夏にはサグレス号の入港、秋にはポルトガル駐日大使もお見えになり、銅座町の「南蛮船」が今年の「長崎くんち」に出演奉納されるので、宜敷くとの事であった。

○六月一日は長崎くんち「小屋入り」の日であった。この日より長崎では夏の

とそこに駐在の若いお巡りさんがやってきた。

「ごそごそしている私達の傍に寄り、箱を覗き込んだ。二人は決して怪しい者でも、怪しいことをしているわけではない。」

お巡りさんは覗き込んだ手前、職務柄なにか言わなければ、と思つたのか、私に「コン魚はウナギですか？」今時の都会のお巡りさん、鯰などみる機会はないのでありません。確かに魚の色や型は、なんとなくウナギに似ているのだから、当らずと雖も遠からずですね。

「似てるけど鯰ですよ、ほうらひげがありますよ。地震と鯰なんていうでしょう。」私は若いので、そんなこと知りませんね。おじさん、やっぱり亀の背中ですね！」と言う。私は「それを言うなら亀の背中ではなくて亀の甲だね」と言う。

「亀の甲ですか。でも、知らなくても犯人逮捕には関係ないか。」と若いお巡りさんは笑いながら自分で納得している。私はお巡りさんに「中島川で鯰が捕れたというだけで驚きですがね！この川では、ほとんど鯰は絶滅種に近いのではないかな。」と、中島川に想いを馳せた持論をいう。ふと、ここで少年をみると様子がおかしい。うつむいたきりで顔色も少しさめている。ビビっている、泣き出しそうである。制服姿のお巡りさんに会ったからである。

立ち入り禁止の川は多いが、中島川は川に入るなども、魚を捕るなども、なんの標識も看板も出ていない。鯰は捕つてよいのか、それとも悪いのか、俄(にわか)の判断を、少年は自問自答しているのかもしれない。

私は、お巡りさんの姿をみると、治安を下させる人がこちらにやつて来られると安全安心を感じ、ほつとするが、少年はそうではなく、場合場合だけに不安そうで微妙である。

本来、真っ直ぐに帰るべきだった少年を引き止めたのは私、そこにはなんらかの責任がある。

「制服姿のお巡りさんと私達がこうしていると、ちよつとみには、な

衣類に「衣がえ」をする。「長崎歳時記」をよむと「この日は家々ナマスをし、氷餅とて正月のカキ餅たくわえ置き、各々台に盛り、客きたる毎に是を出して相祝す。」とある。

○然し、この六月一日は旧暦のことであり、現在の暦では七月十二日となる。すると昔の「小屋入り」は梅雨もあけた現在の七月初旬に行われていたのであります。

○先日、本会の事務所で長崎県九條の会の役員会があり、事務局長の長崎大学の井田先生はじめ、前長崎大学土山学長、佐世保・大村・諫早各地区の委員十八名が集まってこられた。先ず県下九條の会の各地区委員より活動状況の報告があり、更に諫早地区の委員よりは「諫早湾開門・是か非か」との報告もあり、予定時間も延び、大いに賑わった。次回は七月十日午後一時半より開催されるとの事。

○六月六日(日)、長崎民謡平川波声クラブ第二回発表会がNBCホールであり、小玉秋声氏他六名の七段師範格認定式典もあり盛会。特に最後の「長崎さるく節」は観客席も入れての大合唱、大いに長崎を盛り上げて下さった。

○七月といえは先ず七夕がくる。七夕と書いて何故に「タナバタ」と読むのですかと聞かれる。七夕の行事は本来、中国の星祭であったが、我が国では奈良時代、既に伝えられており、平安時代になると宮中清涼殿東庭で「天皇・二星を御覧になり、詩歌を作らせ給う」とある。そして、其の時はお供え物として、南方の二脚には「鯛・鮑・枝大豆・大角豆・茄子・梨・瓜・桃を供えて盃を置き」北の二脚には「蓮花・針・糸・火取香炉・鏡・琴」を置くと記してある。江戸時代の長崎における風習については前記の寛政九年(一七九七)野口文竜が編した「長崎歳時記」(長崎歴史史料編四)に詳しい。

○岐阜県各務原の有名な「くすり博物館」より『古代より女性が求めた綺麗になる化粧や妙薬』の特別企画展を開催しているので「研究を兼ねて来ないか」とお便りを戴いた。(開期は来年三月迄との事)

○今月は次の書物の御寄贈をうけました。
一横浜学の創立者鈴木隆氏より、著者が二十年の歳月をかけて完成された社会奉仕者『渡辺多満の生涯』。大いに感激して読ませて戴いた。(タンダラム社刊・三、八〇〇円)

一松翁軒山口社長より『よむカステラNo.16—文明開化は長崎から』という小冊子を戴く。作者の山本兼一氏他六人の文集で楽しかった。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一—五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

